

3 律令体制崩壊期における山麓集落の出現

塩野西遺跡群では本下荒田遺跡をはじめ、川原田⁽¹⁾・城之腰⁽²⁾・関屋・中屋際・東荒神・西荒神⁽³⁾の7遺跡から平安時代の小集落跡が発見された。これら浅間山麓の高燥な台地上に点々と分布する小集落群は9世紀後葉に出現し、10世紀前葉以後消滅するせいぜい3時期程度の変遷しか考えられない短期存続の集落で、再び集落の出現をみるのは約100年余の歳月を隔てた11世紀代である。本稿では稲作出現の弥生時代以降には居住地としての利用頻度の低かった当地に忽然と集落が出現した意味を考える。

(1) 時間的位置付け

まず、各遺跡の平安時代集落跡から出土した土器群を分析し、時間的前後関係を把握する。また、佐久地方における当該期の土器研究成果との整合も図る。

まず、塩野西遺跡群内では、先に報告された川原田遺跡の平安時代集落で3時期にわたる出土土器⁽⁴⁾の変遷が考えられている。その概要は以下の通りである。

第Ⅰ段階

食膳具は須恵器坏・高台付坏と土師器坏・高台付坏で量は土師器が凌駕する。土師器の内面はともに黒色処理され、丁寧またはやや雑にヘラミガキされる。

また、煮沸具は「コ」の字状に屈曲する口縁部で器内外面のヘラケズリにより薄く仕上げられる、非ロクロ調整のいわゆる「武蔵型」の甕が主体で、ロクロ調整のいわゆる「北信型」の甕は少ない。灰釉陶器は認められなかったが光ヶ丘1号窯式併行の製品が伴う可能性がある。

第Ⅱ段階

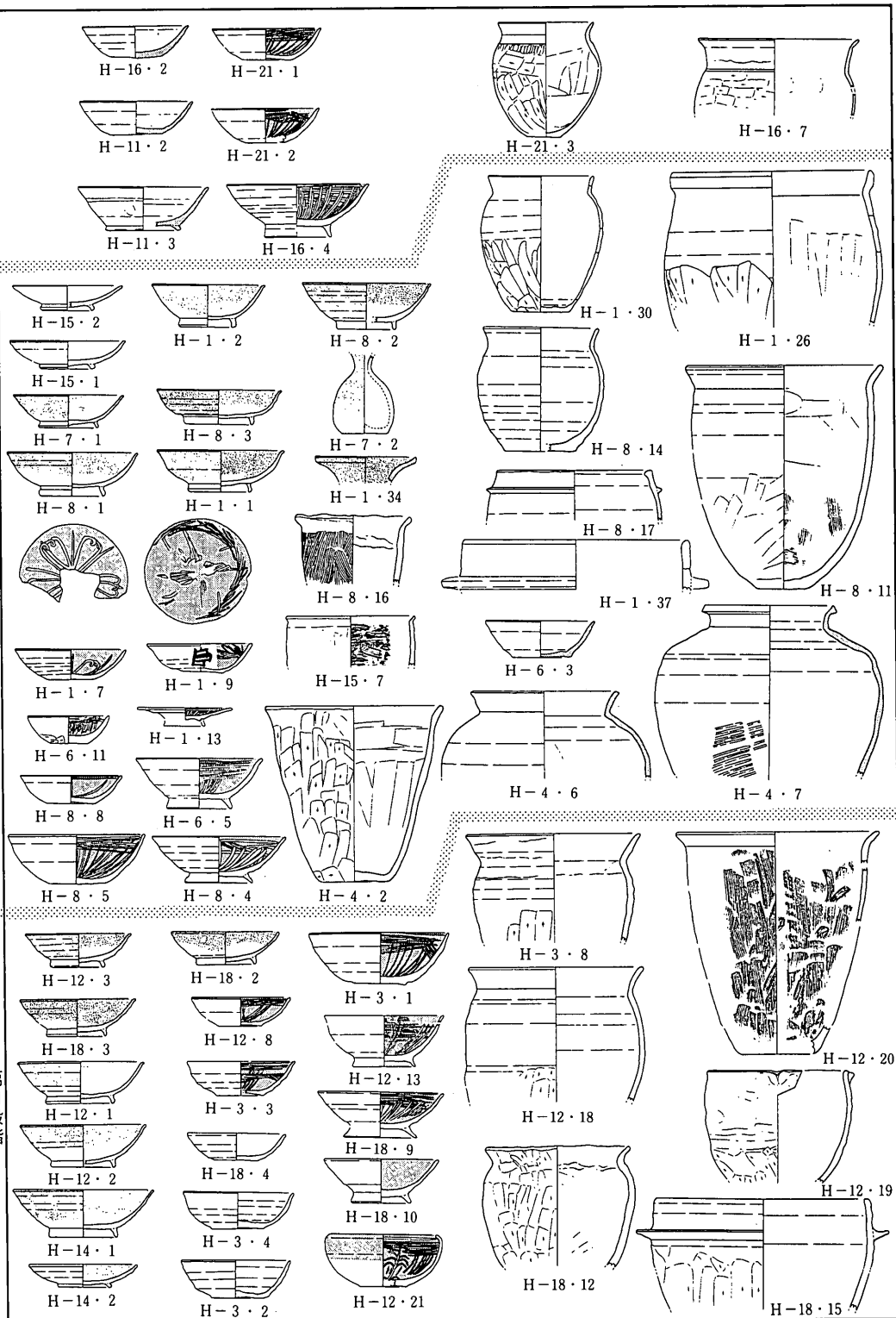
食膳具は須恵器がほぼ消失。土師器坏・高台付坏に推定年代9世紀後半と目される東濃産光ヶ丘1号窯式から大原2号窯式や尾北産篠岡4号窯式期の皿・碗などが共伴する。土師器内面は黒色処理ののち、ヘラミガキが雑なものや、暗文を付す程度の簡略化が図られている。

煮沸具はロクロ調整の「北信型」の甕が主流となる。一方、「武蔵型」の甕が基本的に消失し、非ロクロ調整の甕は小型品や深鉢形の特異形態が目立つ程度になる。

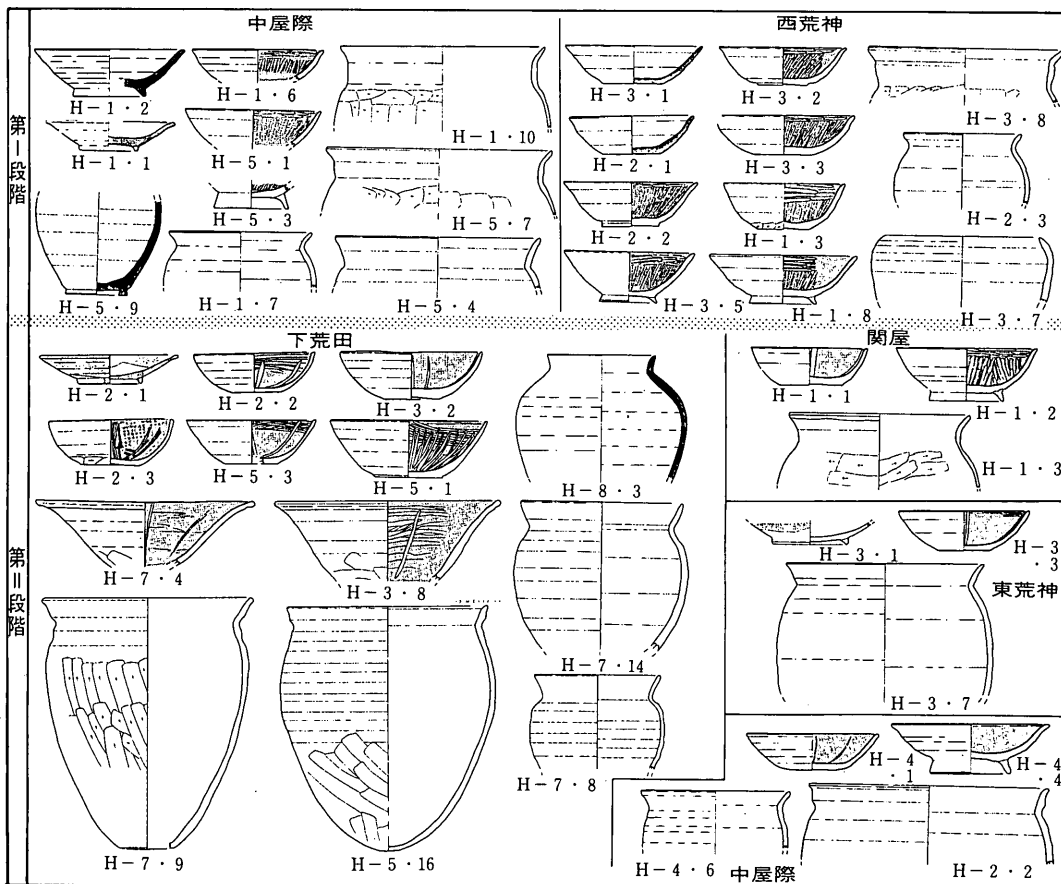
第Ⅲ段階

器種組成は第Ⅱ段階と基本的に変わらないが、食膳具の土師器坏・高台付坏内面に黒色処理、ミガキなどまったくせず、未調整のものがあらわれる。これらは若干小型化の様相もみせる。

以上が基本的な変遷で、佐久地方における平安時代土器の変遷案と対比すると、第Ⅰ段階は御



第65図 川原田遺跡平安時代土器の変遷 (1 : 8) (堤1993より)



第66図 下荒田・東荒神・西荒神・関屋・中屋際遺跡の平安時代土器の変遷(1:8)(小山1995より)

第30表 塩野西遺跡群平安時代集落の変遷

年代	段階	遺跡と該当遺構					
		川原田	城之腰	下荒田	東荒神	西荒神	関屋
9世紀 第IV四 半期	第I 段階	H-5・11・13・ 16・17	H-1	+	+	H-1・2・3	+
10世紀 第I四 半期	第II 段階	H-1・4・6・7・ 8・15・19	H-2	H-2・3・5・7・8	H-1・2・3	+	H-1・2
10世紀 第II四 半期	第III 段階	H-2・3・9・10・ 12・14・18	+	+	+	+	+

代田町根岸遺跡の第Ⅳ段階併行⁽⁵⁾、佐久市栗毛坂遺跡群の8段階⁽⁶⁾、第Ⅱ段階は根岸遺跡の第Ⅴ段階、栗毛坂遺跡群の9段階、第Ⅲ段階は栗毛坂遺跡の10段階にはほぼ併行する。その年代は、出土灰釉陶器と貨幣の共伴状況から第Ⅰ段階が9世紀第Ⅳ四半期、第Ⅱ段階が10世紀第Ⅰ、第Ⅲ段階が10世紀第Ⅱ四半期頃と推定される。

塩野西遺跡群に存在していた平安時代集落群は、下荒田遺跡の11世紀の集落を除き、おおむねこの第Ⅰ～Ⅲ段階の間に営まれたものである。これらを時期別に取りまとてみると第30表のようになる。

第Ⅰ段階の集落跡は中屋際・西荒神・城之腰遺跡、第Ⅱ段階は下荒田・城之腰・中屋際・東荒神・関屋遺跡が該当する。第Ⅲ段階は川原田遺跡以外では明瞭な集落跡が確認されていない。

塩野西遺跡群総体でもてみても創成期の第Ⅰ段階に比べ、第Ⅱ段階に至り集落数が漸増していることをみてとれる。また、時期を跨いで存続しているのは、川原田・城之腰・中屋際遺跡で他は単発的な集落である。その中でも存続期間、集落規模の大きさだけみても、川原田遺跡は他を圧倒している。

(2) 佐久平北部における集落の様相

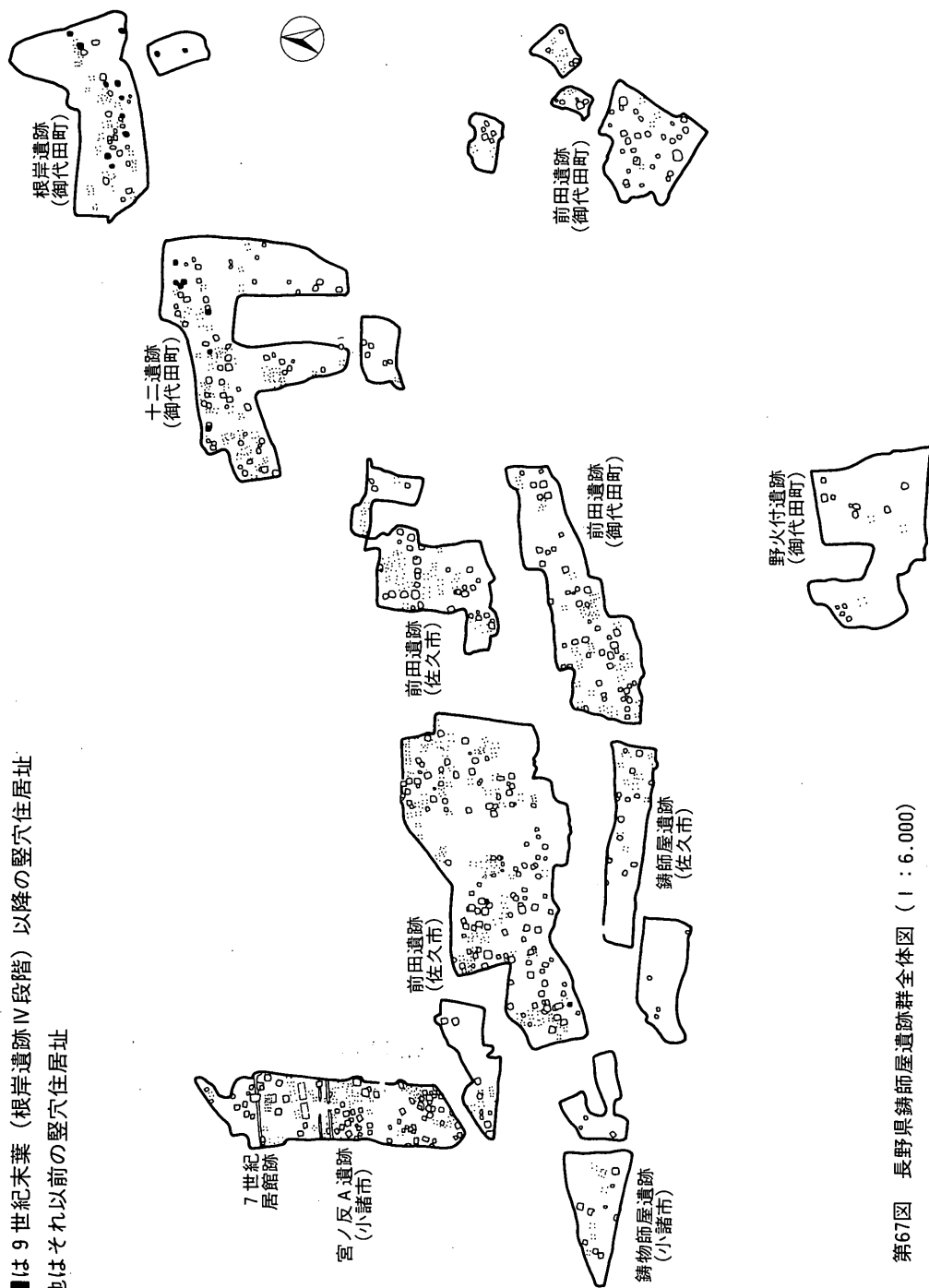
塩野西遺跡群のような山麓に集落が進出し始めた頃、同じ浅間山麓末端部にあたる佐久平北部の盆地平坦部やほかの山間部では集落構成にどのような動きがあったのであろうか。

まず、御代田町御代田・佐久市小田井・小諸市御影に跨って合計11ha以上にも及ぶ広大な発掘調査が断続的になされ、巨大な古代集落の存在が明らかになっている鑄師屋遺跡群⁽⁷⁾の状況を見てみることにしよう。

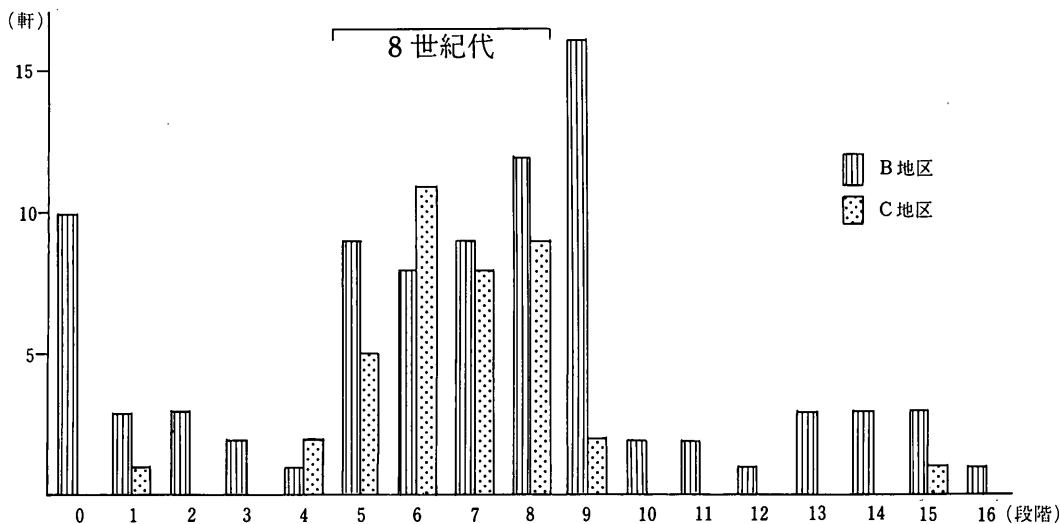
当遺跡群の東西範囲は今もってなお正確に確認されていないが、地理的環境からみて平成5年度に発掘調査された宮ノ反A遺跡⁽⁸⁾はその北端部と推測され、7世紀後半以降に築造された方形にめぐる溝をもつ居館跡がみついている。鑄師屋遺跡群はこの頃から8世紀初頭にかけて最盛期を迎え、以後、徐々に規模を縮小しながら、律令政治の終焉にあたる10世紀初頭（前述の根岸遺跡Ⅴ期併行）をもって集落の営みを終結している。第67図をみると明らかにように塩野西遺跡群に短期的な集落造営が行われていた9世紀末葉～10世紀初頭に至ると、それまで過密なほどにすべての台地上に割拠していた竪穴住居や掘立柱建物址群が、北東隅の一部にまとまりがあるほかは、広大な台地に2軒存在するに過ぎなくなる。明らかにこの集落が衰退していることを示すのであろう。

また、佐久市長土呂の栗毛坂遺跡群では、第68図のように8世紀初頭と目される5段階から9世紀初頭の9段階までの間に竪穴住居数の急激な増加が認められ、それ以降になると激減することが確認されている。

■は9世紀末葉（根岸遺跡Ⅳ段階）以降の竪穴住居址
他はそれ以前の竪穴住居址



第67図 長野県鑄師屋遺跡群全体図 (1:6,000)



第68図 栗毛坂遺跡の住居址段階別軒数（寺島ほか1991を一部加筆）

このほかにも浅間山麓末端部、佐久平北部の細長く展開する台地上には小諸市中原・関口⁽⁹⁾・B⁽¹⁰⁾遺跡、佐久市長土呂・芝宮⁽¹¹⁾・岩村田遺跡群など創始期・終焉期に若干のずれはみられるものの律令体制期にピークを示す大集落跡が軒を連ねるように分布している。そしてたいがいの遺跡が体制崩壊に前後する時期になると、前述の鑄師屋・栗毛坂遺跡群と同様に閑散とした集落の状況を呈する点で一致しているのである。この傾向は時代が新しくなるほど拍車がかかり、11世紀の集落分布はかなり希薄、12世紀では皆無に近い状況となる。以上の発展から衰退の図式は全県的にもほぼ共通するようである。

一方、長野県から群馬県へ通じる八風山西麓の狭隘な谷間、標高850mを越える佐久市香坂地区では、律令体制崩壊期にいたると塩野西遺跡群と同様に小集落の開拓が活発になり、盆地平坦部とは逆の傾向を示す。これらは西⁽¹⁴⁾・東⁽¹⁵⁾・曲尾Ⅲ・兵士山遺跡などで一時期5軒にも満たない集落の存在が確認されたことにより判明した。

（3） 時代背景から山麓集落出現の意味を考える

次に集落がこのような状況になるに至った時代を概観してみよう。

9～10世紀は日本列島に天災が頻発した時期で、信濃でも承和8年（841）、仁和3～4年（887～888）に相次いで大地震に見舞われた。この災害復旧が困難を極めていた仁和4年5月8日、原因不明の山津波から千曲川があふれて大洪水が発生し、佐久・小県・更科・埴科・高井・水内の6郡に壊滅的な被害が与えられた。ただでさえ、平安京造営や蝦夷征伐などの国家政策に

ともなう過重な租税徴収や労役に喘いでいた農民たちには壊滅的な打撃で、困窮は極まりその多くが流民化した。律令制度の強制力により計画的に編成されたと言われる当時の農村から農民は逃散し、変わって新しい村が形成されていくことになる。

信濃の場合、当時国府が置かれた筑摩郡（松本盆地）に中央貴族、有力寺社など中央権力の影響下にある初期荘園が2、3認められるが、荒田や未開発原野の開墾の多くは各地の有力者に当たる郡司や零細な一般農民によって行われていたのが実情のよう⁽¹⁶⁾だ。

塩野西遺跡群で発掘された7つの平安時代集落はちょうどこの頃に形成された。前述のように律令体制解体に伴う集落の山間部への拡散は、佐久平に限定される現象でなく、長野県のほぼ全域に共通することのようである。そしてこの現象が起こる背景には列島規模の政治的な動きや自然災害が色濃く作用していたことが想定されるのである。

前節で述べたように佐久盆地平坦部において律令体制のもとに形成された巨大な古代集落群の急激な衰退を鑑みると、塩野西遺跡群や佐久市香坂に進出した山麓や山間部の諸遺跡の小集落には、窮乏した農民が逃げ込んでいたことを積極的に考慮しなければならない。また、開拓の主導権の所在が、郡司などの地方有力者にあったのか、零細な農民の集合体にあったのかここでは結論が出ないが、今後の性格究明につなげるため、可能な限り想定しておこう。

本遺跡群中で最大規模の集落は川原田遺跡で、存続期間も他に比べ長い。また、遺構・遺物には方形区画溝や全国的に類例の少ない火熨斗、「大平寺・大内寺」と墨書された土師器、朱墨の転用硯などほかの遺跡の集落跡からは出土しなかった、寺院の存在を想定させる特殊な内容も具備していた。また、それに加えて川原田遺跡の隣には古い歴史をもつ古刹真楽寺が存在し、平安時代には山岳仏教が流行していたことなどを勘案して、当地に名前の残らなかった山寺の存在が想定⁽¹⁷⁾されている。塩野西遺跡群に点々と展開された小集落群は、度重なる天災に物心両面にわたり打ちのめされ、逃亡した律令農民たちが心の拠り所として、山岳信仰の場に集まり生起した開拓村であったのかもしれない。この集落経営も冷涼な不安定な生産基盤のためか、長くは続かず、人々はいずこへか去っていった。そして、この地に再び集落の形成をみるのは、1年契約で耕作を請け負う有力農民「田堵」が出現する11世紀なのである。この集落跡は本下荒田遺跡において確認されている。

註

- (1) 御代田町教育委員会 1993 『川原田遺跡—平安・中世編—』
- (2) 御代田町教育委員会 1992 『城之腰遺跡』
- (3) 御代田町教育委員会 1995 『東荒神・西荒神・下大宮・関屋・中屋際遺跡』
- (4) 堤 隆 1993 「1 総括 平安時代の土器様相」『川原田遺跡—平安・中世編—』 御代田

町教育委員会

- (5) 堤 隆 1989 「1 根岸遺跡における土器様相」『根岸遺跡』 御代田町教育委員会
- (6) 寺島俊郎ほか 1991「第18節 5 分析 (1)古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』(財)長野県埋蔵文化財センター
- (7) 御代田町教育委員会 1986 『野火付遺跡』 1987 『前田遺跡』 1988 『十二遺跡』 1989 『根岸遺跡』
佐久市教育委員会 1985 『鑄師屋遺跡』 1988 『鑄師屋遺跡II』 1989 『前田遺跡(第I・II・III次)』
小諸市教育委員会 1988 『鑄物師屋』
(財)長野県埋蔵文化財センター 1993 「4 前田遺跡 5 宮ノ反A遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報10』 以上の成果である。
- (8) (財)長野県埋蔵文化財センター 1993 「5 宮ノ反A遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報10』
- (9) (財)長野県埋蔵文化財センター 1992 「2 中原遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報9』
- (10) 小諸市教育委員会 1991 『関口A・関口B(第二次)・下柏原』
- (11) 佐久埋蔵文化財調査センター 1990 「聖原遺跡I・II」『年報1』 平成元年より発掘開始された長土呂遺跡群聖原遺跡は平成元年より6年まで継続して調査が行われ、律令期を中心とする竪穴住居址・掘立柱建物址ともに検出数1000軒に達しようとしている。
- (12) (財)長野県埋蔵文化財センター 1992 「1 芝宮遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報9』
- (13) 未報告だが岩村田遺跡群上ノ城(昭和47年調査)・西八日町遺跡(昭和58年調査)で古墳時代後期から平安時代の過密集落跡が発見されている。
- (14) 寺島俊郎ほか 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』(財)長野県埋蔵文化財センター
- (15) 昭和54年度佐久市教育委員会により発掘調査。
- (16) 牛山佳幸 「第三章 第四節 奈良時代の村落生活」 井原今朝男 「第五章 第三節 平安時代の村落と生活」『長野県史通史編 第一巻 原始・古代』 長野県を参照。
- (17) 前掲註 (1)